

世界は、死刑廃止に向かう潮流が明確になっているが、日本は、80%位の人が死刑制度を認めているので、死刑を執行する人権無視の「野蛮国」と言われている。小説家の平野啓一郎氏が『死刑について』を上梓している。硬直化した論考ではなく、小説家らしい、柔らかな感性で語っている。単行本で、百頁くらいの小さな本であるが、内容は刺激的で、説得力を持って迫ってくる。平野氏は若い頃、死刑「存置派」であったが、色々な出会いと体験から「廃止派」に変わっていったことを、縷々述べている。「存置派」は罪を犯した人が相当の刑罰を受けることは当然で、「死刑もやむを得ない」との考えで、一種の「自己責任論」である。そこには、報復という概念が強く働いていることは確かである。

平野氏は、「存置派」から「廃止派」に変わった事情を、3点あげている。①警察の捜査の実態を知って、批判的な思いを抱くようになった。警察が容疑者として逮捕した人には、過酷な捜査で自白させると聞かすが、それが、冤罪事件を生んでいる。再審請求は容易に認められず、無罪でありながら死刑を執行された人々がいる。こんな理不尽はない。②重大犯罪の事例では、加害者の生育環境が酷いケースが多い。加害者の「自己責任」だけを追究することだけでよいのかと疑問を持つ。犯した罪が減じられることはないが、加害者に居場所を与えなかった社会にも責任がある。③「人を殺してはいけない」ということは絶対的な禁止で、相対的な規範ではない。刑罰を科す側と科される側を比べれば、刑罰を科す側は倫理的に優位に立っていなければならない。殺人を犯したから、あなたを殺すというレベルまで、国家や社会が墮落したら、法制としての刑罰を科すことは倫理的にできなくなる。国家は、人を殺さない社会を保ち、命を尊重する共同体の一員であることを絶対的な規律として守るべきである。平野氏は、日本は基本的人権を保障する憲法をつくり、憲法を尊重する立憲主義に基づく社会を形成してきたので、この人権尊重の理念から死刑廃止を強調している。憲法9条は、国家間の戦争による殺人も否定しているのである。

死刑には犯罪防止作用があると聞かすが、「存置国」と「廃止国」を比べてみたら、抑止効果がないばかりか、「存置国」の方で、死刑が無差別犯罪を誘発する原因にさえなっている。また、死刑という刑罰で、反省を促すという意見もあるが、死刑によって、生きる可能性が断たれるので、終身刑の導入の方が、反省の成果がある。

死刑制度が支持される理由を、①人権教育が失敗している。日本の場合、感情教育に偏して、個人の権利としての人権については、歴史的、概念的に学ぶことが少なかった。②メディアは勧善懲悪の物語を流し続けている。③謝罪や責任を、死をもって償うという文化がある。これは、存在の抹殺で、「生きて償え」という責任の取り方の方が有用である。④日本は神の存在を意識しないので、人間社会の中で解決しなければという考えになる。最後は神に委ねるという信仰は、人間の間だけで生を抹殺する地獄を造らない。

平野氏は、被害者を支援し、ケアすることを強調する。被害者は加害者に対し、怒りに燃え、極刑を望み、憎しみが硬直化してしまうが、彼らの怒り、憎しみを聞き続けるうちに、「生きて償え」という赦しの萌芽のようなものが膨らんでくる。また、国は政治日程や官僚組織の都合で死刑執行をするのではなく、人権という視点の「優しさ」を持ってほしいと言う。廃止国になった国々は、「存置派」が圧倒的に多かったが、国の政治判断で廃止を決断している。以前、死刑に最も反対しているのは、死刑囚を見守り、死刑執行のボタンを押す刑務官たちであると読んだことがある。死刑は精神的、肉体的に残酷な刑罰なのである。日本も先進国並みに「廃止国」になることを期待したい。